



特集 変革期のアジアと宗教

## 社会参加仏教（エンゲイジド・ブツディズム） — アジア仏教徒の社会的行動そして日本仏教の可能性

はじめに

仏教は、その発祥地のインドからアジア各地また西洋への伝播の過程において様々な思想的文化的発展を示してきたが、二〇世紀の仏教において最も著しい発展といえば、仏教者による平和構築、人権問題、環境保護、社会開発などの各種の社会活動や政治運動への積極的な取り組みである。仏教（とりわけ上座仏教）は出家主義・来世主義を重視するゆえに現世に積極的な関わり合いをもたない宗教と思われがちであり、他の宗教、得に伝道活動の一貫として教育事業や福祉活動に従事するキリスト教と比べて「非社会参加」的な宗教とみなされている。

ランジヤナ・ムコパディヤヤー  
しかし、ダライ・ラマを中心とするチベット仏教徒の解放運動、スリランカのサルボダヤ運動やタイなどの東南アジアでの僧侶らによる社会開発事業、日本仏教の世界平和運動などのアジア各地から仏教徒による積極な社会的政治的関わり、また仏教理念に基づく社会運動の事例があげられる。

近年、そのような仏教徒の社会的覚醒そして積極的な社会参加を示すために Engaged Buddhism（エンゲイジド・ブツディズム）や Socially Engaged Buddhism（ソーシャリー・エンゲイジド・ブツディズム）という用語が出てきている。エンゲイジド・ブツディズムの和訳として「社会参加仏教」という言葉がある（筆者による訳）

語である)。Engaged Buddhism という言葉は、ベトナム僧侶のティック・ナット・ハンがベトナム戦争中、仏教僧侶による反戦運動、とりわけ彼らの焼身自殺を説明するために提唱したとされている<sup>(2)</sup>。次第に、仏教者そして仏教研究者も、仏教徒による社会活動への参加、即ち仏教の対社会的姿勢を示すためにこの用語を用いるようになった。今、欧米の仏教学ではエンゲイジド・ブッディズムは一つの研究分野として発展しつつある。

エンゲイジド・ブッディズムに関する研究は単に仏教の社会活動を紹介するものではなく、仏教の社会的行為の可能性についても検討が行われている。拙著の『日本における社会参加仏教』では、「社会参加仏教」を次のように定義している。「社会参加仏教」は仏教者が布教・教化などいわゆる宗教活動にとどまらず、様々な社会活動も行い、それを仏教教義の実践化と見なし、その活動の影響が仏教界に限らず、一般社会にも及ぶという仏教の対社会的姿勢を示す用語である<sup>(3)</sup>。つまり、人類が直面している様々な問題、例えば戦争、環境破壊、不平等や差別などへ仏教による対応が一つのオルターナ

ティブになれるのが近年のエンゲイジド・ブッディズム研究において課題とされている。

本稿では、アジア各地における仏教徒による平和運動、環境保護活動、社会開発、男女差別などの人権問題への取り組みをとりあげて、現代社会の様々な問題の解決のための仏教者の努力、そして社会活動における仏教思想の活用について考察する。また、日本の仏教者および仏教団体による平和運動、社会福祉、国際協力などの活動への参加に注目し、日本における「社会参加仏教」の実態ないし可能性を明らかにしたい。

### アジアの「苦」と「社会参加仏教」の出現

アジアでの「社会参加仏教」の現象は、アジアの諸仏教国における内戦、他国との戦争、また近代化がもたらした伝統的社会秩序の破壊などの社会的政治的困難を背景にしている。上述したように、エンゲイジド・ブッディズムという言葉の由来は、ベトナム戦争の際、僧侶らによる反戦運動に辿ることができるといえる。ベトナム戦争がもたらした悲劇を世界に訴えるために、ベトナムの僧侶ら

は焼身自殺という手段を選んだのである。同じベトナム僧侶のティック・ナット・ハンは、自分の師匠や仲間らによるこのような過激な反戦運動を説明するために、エンゲイジド・ブッディズムという言葉を使つたとされている。この言葉は、一九六三年に出版されたハンの著作の題名として最初に現れた。

ベトナム戦争がもたらした被害・苦悩を眼前にしたハンは、それに対して仏教の教えに基づく対処として、マインドフルネス (Mindfulness) やマインドフル・プラクティス (Mindful Practice) に基づく積極な社会参加を提唱した<sup>(4)</sup>。マインドフルネス (バリ語で sati, サティ、サンスクリット語で Smriti、漢訳「念」とは「気づき」や「注意」の意味を持ち、仏教における瞑想の主要な技術の一つである<sup>(5)</sup>)。現代的な解釈として、またヴィパッサナー瞑想や禅瞑想の方法として、マインドフルネスとは、自らの観念や行為を意識し、自分がおかれている状況を正しく判断することとその自覚された状態のことを指している。ハンおよびその他のエンゲイジド・ブッディスト (社会参加仏教徒) におけるマインドフルネス

やマインドフル・プラクティスは、自分の周囲にある人々の苦しみに気づき、その苦悩の原因となる社会的状況を正しく理解し、その智慧・覚醒に基づく実践的行為を行うというようなことである。

一九六四年から一九六六年の間、ハンは「ティエブ・ヒエン教団」(Tiep Hien Order of Interbeing) を設立した。「ティエブ・ヒエン」は「相即」(Interbeing) を意味し、その言葉で、ティック・ナット・ハンはあらゆるものの相互関係、特に被害者と加害者との関連性、または個人の精神的平和と世界平和との関係などを説明している<sup>(6)</sup>。そして、教団の社会参加を導くガイドラインとしてマインドフルネスに基づく一四項目の戒律を定めた<sup>(7)</sup>。例えば、四つ目の戒律は次のように述べている。「苦悩との接触を避けるな、または、苦悩から目を閉じるな。現世における一生には苦悩が存在することを自覚しなくてはならない。個人的接触として訪問、イメージ、音を含め、あらゆる手段で苦しんでいる人と一緒にいる方法を探せ。このような方法で、現世における苦悩に対して自己と他者を自覚させよう<sup>(8)</sup>」。ハン是非暴力に徹した社会活動を推進し、